

園だより



令和5年8月1日

社会福祉法人新田保育園

園長 大西 陽子

未来に繋ぐ環境

新型コロナウィルスの感染症分類変更に伴い、保育内容が以前の状態に戻ってきました。ひよこぐみとぞうぐみが、手を繋いで散歩に行く。パーテーションなしの食事、一緒に食べる保育者と子どもたちの笑顔。「おいしいね」という共感。「子どもたちに話が伝わり、よく聞くようになりました」「歌も手遊びも！子どもたちの目がキラキラするのです」というマスクを取った保育者の言葉。ですが、子どもたちを育くむ環境は、さらさらと簡単に崩れてしまう砂の上に立っていて災害、戦争、パンデミックが到来すればあっという間に崩れてしまうのだということが、コロナ禍の3年で痛感してきたことです。この猛暑にも、温暖化がどうなってしまうのか危惧します。

新田保育園は土手の青空保育、バス保育を経てこの地に移ってきたという経緯があります。今の土地を貸してもらうために昭和20年代後半、職員と保護者で、新田の町中の地主さんにお願いに回ったという記録が残っています。当時の地主の奥様が手記を残しております。『保育園と私の出会いはある日突然、我家の玄関に立った、4・5人の見知らぬお母さん方の訪問から始まるのです。どんな所でも良いから土地を貸して頂きたいのです。何としても子どもたちを安心して預ける施設が欲しいのです。どうぞお願ひします。話す言葉に一つの虚偽も粉飾もない、そこにあるのは母の一途さだけ、私はこのお母さん方に本物の心を見た思いでした。～中略～ある夜会社から帰宅した夫が私に申しました。「いろいろ考えてみたが土地を貸すことにして。この土地の利用価値が高まればご先祖様にも言い訳がたつし、うちでも直に子どもたちがお世話になるようになるさ」私は思わず「ああよかったです」と声を上げお母さんの分まで「有難うござります」と言ったものです。そしてそのあと、建物ができるまでのお母さん方の目を見張るような団結力と行動力には只この頭の下がる想いでした。～後略～』戦後まもなくの混沌とした時代に、子どもを預ける保育園を選ぶのではなく『創る』という所から始まっているというその苦労は、私たちには計り知れません。

しかし、子どもたちを良い環境で育みたいという、親、保育者の思いは時代が変わっても同じです。先人からのバトンを繋ぎ、今よりもっと庭を広くし、子どもたちの活動を充実したいと考えています。世界中の子どもたちが毎日満足して入眠できますように。そして私たちの子どもたちが、毎日遊び疲れて眠る世界が継続するよう、より良い環境をさらに求めて新田保育園は奮闘してまいります。

- 夏季中、卒園児の学生アルバイト、保育実習生が実習で子どもたちと関わります。
 - 10月28日（土）保護者の会主催、ミニバザー開催します。ご家庭で不要な物品を保管しておいてください。